

機関番号：12201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20730546

研究課題名（和文）児童生徒の相手意識と文章表現に関する発達の・国際的研究

研究課題名（英文）International comparative research on children's development of audience awareness in their writing

研究代表者

森田 香緒里（MORITA KAORI）

宇都宮大学・教育学部・准教授

研究者番号：20334021

研究成果の概要（和文）：本研究では、児童生徒が文章表現を行う際に、相手（読み手）の違いによってどのような言語調整行動を行うかについて、日英で国際比較調査を行った。その結果、語レベル、視覚レベル、文量レベルの調整においては日英共通で顕著な調整が行われた。一方で、日本人児童は英国人児童に比べ、より多様な調整を行っていることも明らかにした。またそれらの調整は、表記レベル、視覚レベルに集中してメタ認知されていることもわかった。

研究成果の概要（英文）：Children often adjust their language in their writing according to audience. In this research, both Japanese and British children adjust their expression at word, visual, quantity level. Japanese children especially have various means to adjust their expression. Moreover, they have metacognition of their adjustments at letter and visual level in their writing process.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2008年度 | 1,600,000 | 480,000 | 2,080,000 |
| 2009年度 | 0 | 0 | 0 |
| 2010年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,400,000 | 720,000 | 3,120,000 |

研究分野：国語科教育

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：文章表現、相手意識、作文、発達過程、国際比較、イギリス、メタ認知

1. 研究開始当初の背景

(1)作文指導において「読み手（相手）」を設定することはこれまでに数多く実践され、その効果が指摘されている。しかし実際に児童生徒が、文章表現過程において自らの相手意識をどのように言語表現と関連させ実現させようとしているのかについて明らかにした研究は、これまでに無い。

(2)心理学の領域においては、文章表現過程における読み手の役割について、その具体的な方略等に関して先行研究の蓄積がある。しかし、相手意識がどのように文章表現に表出さ

れ、それがどのような発達過程を経て変化するのかについては、明らかにされていない。(3)同時に、2国間の児童作文の比較といった国際的観点を持った研究も未だ無い。(4)これまでに、児童生徒を対象に作文調査を行い、文章表現における相手意識の表出の実態についての分析・解明を行っている。その結果、相手意識の発達過程に関する以下の仮説モデルを提示してきた。

①文章表現に表れる相手意識の実際は、発達段階によって異なる(小学校低学年段階においては、伝達したい内容の選択という

点に相手意識が強く働くのに対し、高学年及び高校生段階においては、表現形式や情報配列といった点に働く。

②文章産出過程における「相手」の機能の仕方は、発達段階によって異なる(伝達行為の動機付けから、文章産出過程のモニタリング機能へ)。

(5)そこで本研究では、日本と英国の小中学生を対象に作文調査を行い、(4)の仮説モデルの検証を通して、発達の・国際的観点から、児童生徒の相手意識と文章表現との関連性について明らかにすることを構想した。

2. 研究の目的

本研究は、児童生徒の相手意識と文章表現との関連性について、発達の観点及び国際比較の観点から解明することを目的とする。これまでに提示してきた仮説モデルを、さらなる調査を行うことによって検証する。また日本と英国の2カ国間でデータをとることによって国際比較を行い、相手意識の実態をより精緻に解明する。日本での調査においては、相手意識の表出がどの程度メタ認知されているかについての追加調査も行う。

3. 研究の方法

本研究は、以下の方法によって行った。

(1)相手意識と作文指導に関する文献を国内外から収集し、相手意識の発達に関する知見を得るとともに、日本と英国との違いについて確認する。

①相手意識と作文指導に関する文献を国内外で収集し、読み手を設定することが作文指導においてどのような効果をもたらすのか、また、児童生徒に相手意識を持たせるための方法にどのようなものがあるのか等について確認する。

②日本の国語教科書における作文単元を対象に調査する。具体的には、どのような「相手」がどのような文種と関連させて設定されているか等について調査する。

(2)児童生徒を対象とした作文調査課題の検討を行う。その際、協力校の教諭からも意見を聴取する。

これまでに、同一内容の文章を異なる複数の相手に向けて書くという「書き分け課題」を、相手意識を発動させる調査方法として提案してきている。本調査でもそれを採用するが、児童生徒にとって書きやすく、かつ一定程度の必然性や現実性のある課題が必要となる。この点を検討するために、あらかじめ調査前に協力校の教諭らと協議を行う。

(3)協力学校(日英の小学校及び中学校・高等学校で)作文調査を行う。今回はメタ認知の実態も明らかにするため、「振り返りシート」を用意し、作文課題を書いてもらった後に、その作文を各自振り返り言語化する調査

も行う。

(4)得られた作文データを分析し、相手意識の表出の分析を行う。具体的には、異なる複数の相手に向けて書かれた同一内容の文章を個人間で比較し、児童生徒個人々の相手意識の表出がどの言語表現と関連しているかについて特定していく。

相手によって言語表現が異なる場合、それを「言語調整行動」と見なし、「表記上の調整」「語彙選択上の調整」「文構造上の調整」「視覚上の調整」「内容上の調整」の六つの観点から分析を行う。これらの観点は、日本語教育研究からの知見を援用している。

(5)また、それらの言語調整行動が、児童生徒にどの程度メタ認知されているかについての分析も行う。具体的には、「振り返りシート」に書かれた記述と作文の記述内容とを比較し、自らの言語調整行動がどの程度メタ認知されているかについて分析する。

(6)得られた成果を学会誌に投稿することによって発表する。また、協力校を中心とする地元の教育研究大会でも発表することで、現職教師および専門家らから意見を聴取する。

4. 研究成果

(1)相手意識と文章表現に関する国内外の文献を収集し、作文指導における「相手意識」概念について、日本と欧米での差異について調査した。その結果、以下の違いを明らかにした。

- 英語圏を中心とする欧米の作文教育
→「相手意識」は、文章構成や表現戦略等の評価枠組みとして機能する傾向が見られる。
- 日本の作文指導
→書くための動機付けや内容決定に関わる概念として扱われる傾向にある。

(2)日本の国語教科書(小中学校用、過去20年分)における作文単元を調査し、どのような「相手(読み手)」が設定されているかについての調査を行った。その結果、学年段階に応じて次のような傾向が見られた。

| 学年 | 相手 | 文種 | 効果 |
|------------|----------------------|----------------|-----------------------------------|
| 小学校 低学年 | 家族 教師など | 手紙 報告 | ・書くための 動機付け ・書く事柄の 準備 |
| ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| 中学校 | 疎遠な人物 架空の人物 など | 手紙 報告 意見 | ・各文種の形 式を学ぶ ・物語等の読 解を深める |

低学年では比較的親しい相手に向けて書く活動が設定されており、これは書くための動機付けや書く事柄を準備させる要因として位置づけられている。学年が上がるにつれ、疎遠な人物や架空の人物など多様な「相手」が設定されるが、これらは手紙文形式の学習や物語読解といった学習目標の過程に組み込まれていることが明らかになった。

(3) 上記(1)(2)の成果をふまえて、これまで行ってきた調査結果を再検討した。具体的には、相手(読み手)の親疎の違いによって児童生徒の作文がどのように変化するかを調査した過去のデータを見直し、特に「疎遠な相手」という属性は、文章表現の調整にほとんど影響を及ぼさないのではないかとの問題意識を新たに得た。このことは、従来の教科書における作文単元の「相手」の設定を見直す上で重要な観点となる。

(4) 日本人児童と英国人児童(ともに10-11歳)に対して行った作文調査をもとに、相手意識の表出(相手の違いによる言語調整行動)の特徴を以下にまとめる。

| 日本人児童 | 英国人児童 |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 文字表記の変化や単語への言い換え(特に漢字に集中する) 色やイラストの使用 固有名詞や会話文などの情報を減らす 相手の男女差による色の使い分け 相手の属性に関する情報(絵、文章)の付加 メタ言語的情報の付加 | <ul style="list-style-type: none"> 簡単な単語への言い換え 色やイラストの使用 描写や会話文などの情報を減らす |

日本人児童と英国人児童との共通点としては、以下のものを指摘することができた。

- ① 語レベルでの言い換えを行う。
- ② 色や絵を使用して書き分ける。
- ③ 文量を調整する。

①については、日本人児童は特に漢字に集中してみられた。この調査の場合、相手の設定を「母語熟達者」と「非母語話者」の2種類にしたこともあり、「非母語話者」については、漢字使用をできるだけ避けるという配慮が特徴的に表れた。しかし漢字圏でない英国人児童は、平易な語に書き換えたり省略したりといった調整行動を行っていた。

また③については、英国人児童は文種の形

式を維持したまま情報を省略していたのに対し、日本人児童は文種の形式から多少逸脱してでも相手にわかりやすい内容を試みて情報を増減させるという傾向が見られた。

さらに日本人児童のみに見られた傾向としては、以下の点が挙げられる。

- ① 相手の属性のうち、男女差の方をより強く意識する。
- ② 相手の属性によって想起された文章を新たに付加する。
- ③ 「漢字にひらがなをつけておきました」など、相手への具体的な配慮をメッセージとして付加する。

これらの事実から、相手意識を持つことによる言語表現の調整行動は、日本人児童の方により多様にみられることがわかった。

(5) 日本人児童のみを対象に、作文調査後に「振り返り用紙」への記入を行った。それらのデータから、相手意識を持つことによる文章表現の調整が、どの程度メタ認知されているかという点について分析した。その結果、以下のことが明らかとなった。

- ① 漢字を中心とする表記上の調整や、色・絵等の視覚上の調整についてはメタ認知されている。
- ② しかし、文レベルの調整や内容上の調整については、明確な振り返りはなされていない。相手意識を持つことによって少なからず書く事柄が調整されるにも関わらず、その点についてはメタ認知されていない。

以上の成果から、これまでに提案してきた相手意識の発達過程に関する仮説モデルの一部が検証された。これまで認知心理学の分野においては、文章表現過程における「相手」の役割が発達によって分化していくとの指摘がなされている。本研究では、その「相手」が分化していく過程を、具体的な文章表現の違いから確認し明らかにしたと言える。この成果は、相手意識の発達に即した作文カリキュラムの開発を目指す上で重要なものとなるであろう。

ただ、今回の研究では、相手校の都合もあり、小学校-高等学校段階での調査を行うという目標が日英ともに達成できず、一部の学校のみでの実施となってしまった。よって成果の多くは、小学校児童のデータを中心としたものとなっている。今後はさらに幅広い年代のデータを得ながら、引き続き検証を行う予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 森田香緒里、小学生の文章表現における相手意識の表出とメタ認知、宇大言語論究、査読無、22号、2011、pp.13-22
- ② 森田香緒里、イギリス・ロンドンにおける国語力向上のための取り組み、宇大言語論究、査読無、20号、2009、pp.1-10

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森田 香緒里 (MORITA KAORI)
宇都宮大学・教育学部・准教授
研究者番号：20334021